



UNIVERSITY OF CAMBRIDGE INTERNATIONAL EXAMINATIONS  
International General Certificate of Secondary Education

**FIRST LANGUAGE JAPANESE**

**0507/02**

Paper 2 Reading and Directed Writing

**May/June 2008**

**2 hours 15 minutes**

Candidates answer on the enclosed Answer Booklet

No Additional Materials are required.

**READ THESE INSTRUCTIONS FIRST**

Write your Centre number, candidate number and name on all the work you hand in.

Write in dark blue or black pen.

Do not use staples, paper clips, highlighters, glue or correction fluid.

Answer **all** questions.

At the end of the examination, fasten all your work securely together.

The number of marks is given in brackets [ ] at the end of each question or part question.

**受験生への諸注意**

提出物全て（解答用紙、その他）に、センター番号・受験番号・氏名を記入しなさい。

黒または濃い青色のペンを必ず使用すること。

ホッチキス（ステープラー）やペーパークリップ、蛍光ペン、のり、および修正ペンなどの使用禁止。

**すべての問題**に答えなさい。

試験終了時には全ての提出物をまとめ、必要によっては配布されたひもなどでくくりなさい。

配点は各設問の最後にある [ ] 内に示されています。

This document consists of 7 printed pages, 1 blank page and 1 inserted Answer Booklet.



## パート1

次の【A】と【B】は小学校における英語必修化について述べたものです。二つの文章を読んで、問1と問2に答えなさい。

### 【A】小池生夫 明海大学教授 インタビューから

英語は、グローバル化した世界のコミュニケーションの道具として欠かせない。国際競争の中で、政府は人類に貢献するためにも国家政策として外国語政策に取り組むべきだ。欧州連合(EU)各国や、中国、韓国などアジア諸国が、早々と政府主導で小学校英語必修に踏み切ったのも、グローバル化した世界での生き残りをかけているからだ。この流れに乗り遅れた日本人の英語能力は、世界、アジア諸国で相当低いレベルに落ち込んでいる。外国人との交渉で不利益をこうむるケースも後を絶たない。

遅きに失した感はあるが今回の必修化で日本もようやく一歩を踏み出した。これを機に国家の基盤づくりとして外国語政策に取り組んで欲しい。もはや一部エリートだけが英語を使えればよい時代ではない。世界と渡り合える人材を多くつくるためには、すそ野を広げて頂点を高くする必要がある。小学校からの必修化は欠かせない。中国、韓国、台湾では低学年から週二、三時間、体系的な必修カリキュラムで視聴覚教材を使い、担任や専科教員が英語で教えている。高校までに学ぶ単語は日本の倍もある。高い到達目標が設定できるのは、大学までの一貫したカリキュラムのもと、小学校から脳に英語の回路をつくっているからだ。児童の言語能力は天才的だ。特にリスニング力、発音、リズムや英語らしさを受容する能力を生かすべきだ。日本でも現に教育特区の英語学習校のアンケートでも、開始時期は小学校一年から、週一、二時間が望ましいという回答が圧倒的だ。英語の必要性を直感的に感じている母親たちの強い支持もある。すべての児童は英語を学ぶ機会を得る権利があると考えべきだ。

その意味では、今回文部科学省が出した教科化を見送り五、六年生で週一時間程度教えるという提案は、物足りない。せめて三年から週二時間、必修教科とすべきだった。教科にするには教員養成から手をつけなければならない。今回教科化を見送り、単に必修としたのは体制をつくる予算が手当てできないからだろう。それに、担任と外国語指導助手(ALT)あるいは地域人材という組み合わせを指導の基本にしたのは、現在の体制でできるところからやるという意味だ。小学校担任では英語の教え方について素養がないから不安という声もあるが、今やっている英語活動などをみると担任はそれなりの効果を上げている。児童英語の教師養成講座を持つ民間非営利団体(NPO)もある。CD やビデオなどをはじめとした教材開発も進んでいる。十分に研修して、これらを活用すればいい。

英語を必修化すると日本語力が落ちるといった批判もあるが、実験校のデータではむしろコミュニケーションが活発になる。週一、二時間で日本語力に影響なんかあるわけがない。英語と日本語は言語教育として協力できるものなのだ。教科にできないなら当面は、一年から四年までの選択英語活動と必修英語を連結すべきだ。外国語政策は国家の盛衰にかかわる。将来を見通した外国語教育政策に戦略的に取り組んでほしい。小学校から大学までの一貫システムを構築し、国民の国際対応能力を向上させることは、国や民族の生存にとって欠かせない。

**【B】鳥飼玖美子 立教大学教授 インタビューから**

アジアの各国などで小学校に英語が導入されているからといって、足元も固めないまま必修化は無責任だ。小学校五、六年で、週一時間程度英語を必修にしたところで親が期待する効果が出るわけがない。結局これでは中途半端だ、という批判が出るのは必至で、次は教科にして専門の先生をつけるということになるのは目に見えている。実はそこが本当の狙いなのだろうが、小学校段階では、英語よりも、母語で考え、表現する人間としての基礎力を養う方が先だ。

親の七割が小学校英語必修化に賛成しているというが、この程度やったところで、目指す「仕事で使える」英語にはつながらない。海外に赴任して親が英語で苦勞しているのに、子どもはあつという間にしゃべれるようになるから、やっぱり小学校から英語を、となるのだろう。だがそういうケースでも、身につけるのはお子さま英語で、仕事で使えるようなものではない。日本語でも、小学生の日本語では仕事に通用しない。それと同じだ。いわんや英語環境にない日本の小学校で一時間やった程度では単なる気休めにすぎない。

それどころか中学に入る段階で大量の英語嫌いが生まれる心配もある。実際、小学校の総合的学習の時間で英会話を取り入れる学校が出てきて以降、中学入学時点の作文に「ぼくは英語が苦手です」と書く子が出てきている。必修化となればこうした傾向は増幅する。子どもの可能性の芽をつぶすことにならぬよう、英語の導入期こそ優秀な人材を当てなければいけないが、今回は、必修化といっても教科ではない。英語の指導法を学んだ専門の先生でなく、素人の担任とネイティブスピーカーの外国語指導助手(ALT)によるチーム・ティーチングが指導の中心になる。英語がおぼつかない担任、ALTも英語を話せるというだけで、教育のことを知らない。無謀と言わざるを得ない。

必修化の狙いに「コミュニケーション能力の素地育成」を挙げているが、本当のコミュニケーションは、自分が考えた意見をどうやって相手に分かるように説明するか、相手の言ったことを理解してけんかしないよう反論するというような非常に高度のものだ。英語力以前に、母語で積極的にコミュニケーションを図ろうという根っこを育てなければ、国際コミュニケーションなどできるわけがない。小学校は、母語を使った言葉とコミュニケーションの体験学習に力を置くべきだ。基本的コミュニケーション能力さえ育てば、その言語社会にあったコミュニケーションの仕方を身に付ける力も育つ。そして英語が堪能な小学生を育てたいのなら、相手が先生だろうとだれだろうとおかしいと思ったら「どうして？」と自己主張できる生意気な子どもを育てる覚悟が必要だ。一方で「先生の言うことを聞け」という指導が変わらないのでは子どもは戸惑うだけだ。

今求められているのは中学校英語の充実だ。授業時間数を現在の倍の週六時間に増やし、十五人の少人数クラスにするなど、資源を集中的に投入すべきだ。これまでの英語教育の検証もなしに、小学校英語必修化というのは無責任だ。

問 1 【A】のこいけいくお小池生夫教授と【B】のとりかいくみこ鳥飼玖美子教授のインタビューに共通するトピックについてそれぞれのアプローチを比較対照しながら、400 字程度で要約しなさい。

問 2 【A】のこいけいくお小池生夫教授と【B】のとりかいくみこ鳥飼玖美子教授の記事に対して、新聞の読者欄に投稿する記事を書きなさい。その際、賛成か反対かはっきりと述べ、自分の経験や実例などを添えて説得力のある記事を 300 字程度で簡潔に書きなさい。

[20]

## パート2

問 次の3-7の空欄( )に入れるのもっとも適するものを、下のア-エの中から一つ選んで、答えなさい。

3 その合唱団は、天に響き渡るような歌声( )有名だ。

- ア から
- イ に
- ウ で
- エ より

[1]

4 山田さんは、( )学者らしい物の考え方をする。

- ア いかほど
- イ いかにか
- ウ いかにも
- エ いかなる

[1]

5 今日これからお話しするのは、アジア文化交流機関の後援( )展示会についてです。

- ア によった
- イ によって
- ウ による
- エ により

[1]

6 彼女には、彼女( )の考え方があるのだから、黙って見守ってあげましょう。

- ア なる
- イ なり
- ウ なって
- エ なれ

[1]

7 「それでは明日、何時ごろお宅に( )。」

- ア 伺いましょうか
- イ 伺いでしょうか
- ウ 伺いなりますか
- エ 伺うですか

[1]

問 次の8-12の空欄( )に入れるのもっとも適するものを、下のア-エの中から記号で答えなさい。

8 祖母は病気で衰弱し、水を飲むこと( )できない。

- |   |     |   |    |
|---|-----|---|----|
| ア | ばかり | イ | でも |
| ウ | さえ  | エ | だけ |

[1]

9 この問題は、私一人では解決できない。すまないが、( )を貸してくれ。

- |   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| ア | 目 | イ | 肩 |
| ウ | 足 | エ | 口 |

[1]

10 理路( )と話せば、相手に考えが伝わりやすい。

- |   |    |   |    |
|---|----|---|----|
| ア | 完全 | イ | 整然 |
| ウ | 整頓 | エ | 当然 |

[1]

11 本人のためを思い、( )苦言を呈する。

- |   |      |   |     |
|---|------|---|-----|
| ア | あえて  | イ | よって |
| ウ | いたって | エ | そって |

[1]

12 私の父は( )一致の人で、約束は必ず守る。

- |   |    |   |    |
|---|----|---|----|
| ア | 満場 | イ | 生態 |
| ウ | 信条 | エ | 言行 |

[1]

問 次の 13-17 の下線で示された言葉について、それぞれの類義語を書きなさい。(例:安全-

- 13 誠意を尽くせばきっと、あなたの気持ちが相手に伝わるだろう。
- 14 オーダーメイドのコンピュータは、見積<sup>みつもり</sup>によると、15万円くらいだ。
- 15 江戸時代、この地方は大名が統治した。
- 16 その案については、今回の委員会で全委員の賛同を得ることができた。
- 17 彼の成功は、ひたむきな努力の結晶だ。

[5]

問 次の 18-22 の下線の単語の品詞名を下から選んで記号で答えなさい。

18 そして、彼女 19 は 20 ゆつくりと 21 窓 を 開け 22 た。

- |        |       |       |      |
|--------|-------|-------|------|
| ア 形容動詞 | イ 助動詞 | ウ 連体詞 | エ 助詞 |
| オ 接続詞  | カ 名詞  | キ 形容詞 | ク 動詞 |
| ケ 副詞   | コ 代名詞 |       |      |

[5]

---

*Copyright Acknowledgements:*

Part 1 (A)                    © Hiroshi Yamada; *The Chugoku Shimbun*, 19 August 2006.  
Part 1 (B)                    © Hiroshi Yamada; *The Chugoku Shimbun*, 19 August 2006.

Permission to reproduce items where third-party owned material protected by copyright is included has been sought and cleared where possible. Every reasonable effort has been made by the publisher (UCLES) to trace copyright holders, but if any items requiring clearance have unwittingly been included, the publisher will be pleased to make amends at the earliest possible opportunity.

University of Cambridge International Examinations is part of the Cambridge Assessment Group. Cambridge Assessment is the brand name of University of